Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-06

巻頭言

石田, 憲治

(Citation)
海事博物館研究年報,35

(Issue Date)
2007-03

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005785

巻頭言

海事博物館館長　石　田　憲　治

海外出張時に私の楽しみは、時間を見つけて博物館訪問や骨董屋巡りです。

大学を卒業して、最初の乗船地となった1973年のシンガポールには、20階を越える高層ビルはなく、町並みは戦後28年経っていたとはいえ自動車とテレビが加わった位で、市民の営みは南国そのものでした。ところがここ20年の変化ぶりは驚くばかりです。

最近訪れたシンガポールは淡路島と同じくらいの所に、海には人工島を延ばし、空には古い建物、特に住宅を取り壊して見上げるほどの摩天楼を林立させ、地下にはモグラ道のごとく地下鉄を走らせて小ニューヨークや小東京を出現させようとしているようです。

取り壊させられる前にあった商店の看板、街の角々に在った日本の地蔵さんに似た仏教やヒンデューの祠、家の中には何世代かの生活が浸み込んだ家具、調度品はどこへ消えてしまったのだろうか。博物館に移動させられた幸運な住居はあるかもしれませんが、大部分の持ち運べるものは、興味ある人や骨董屋に引き取られて値札が貼られ店頭に並ぶことになったのかもしれません。極言すると多くのものが、骨董屋の価値判断で後世に残るかゴミとなって消えてしまう。

博物館に保存・整理されて、後世にそれらの用途や役目の説明とともに残れば幸運です。

シンガポール政府やデベロッパーは、街全体を「近代化」/「西洋化」の名目で南国のシンガポールの人、自然、物を含めて国土全体を人工空間、あるマレシア人に言わせると巨大「ディズニーランド」に変えようとしている。これまで世界中では、人間の都合で多くの動植物を絶滅させたり、させようとしていることを、日本を含め人間同士で同じ絶滅ごっこをしているように思えてなりません。

将来、シンガポールの摩天楼を含む人工空間は取り壊されて何に変わるのでしょうか。摩天楼を１つ博物館として残さない限り移転は不可能です。骨董屋たちは何を切り取って誰に売るのだろうか？歴史や民族博物館には21世紀にオフィスに存在した物はほぼ世界共通品であり特段残しておく必要性は薄く、住人の営みと特徴ある物の映像のみが後世に引き継がれるように思います。そうなると建物としての「博物館」は不要となり、誰もがアクセスできるネットを設け、映像を整理入力できるスタッフと１台のパソコンのみが役目を果たすことになりはしないだろうか、ビル街の谷間で思いました。